日清戦争異聞（原田重吉の夢）

萩原朔太郎

上

日清戦争が始まった。「支那も昔は聖賢の教ありつる国」で、孔孟の生れた中華であったが、今は暴逆無道の野蛮国であるから、よろしく膺懲すべしという歌が流行った。月琴の師匠の家へ石が投げられた、明笛を吹く青年等は非国民として擲られた。改良剣舞の娘たちは、赤き襷に鉢巻をして、「品川乗出す吾妻艦」と唄った。そして「恨み重なるチャンチャン坊主」が、至る所の絵草紙店に漫画化されて描かれていた。そのチャンチャン坊主の支那兵たちは、木綿の

綿入(わたいれ)の満洲服に、支那風の木靴(きぐつ)を履(は)き、赤い珊瑚(さんご)のついた帽子を被(かぶ)り、辮髪(べんぱつ)の豚尾を背中に長くたらしていた。その辮髪は、支那人の背中の影で、いつも嘆息(ためいき)深く、閑雅に、憂鬱に沈思しながら、戦争の最中でさえも、阿片の夢のように逍遥(さまよ)っていた。彼らの姿は、真に幻想的な詩題であった。だが日本の兵士たちは、もっと勇敢で規律正しく、現実的な戦意に燃えていた。彼らは銃剣で敵を突き刺し、その辮髪をつかんで樹(き)に巻きつけ、高粱(コーリャン)畠(ばたけ)の薄暮の空に、捕虜になった支那人の幻想を野曝(のざら)しにした。殺される支那人たちは、笛のような悲声をあげて、いつも北風の中で泣き叫んで

いた。チャンチャン坊主は、無限の哀傷の表象だった。

陸軍工兵一等卒、原田重吉は出征した。暗鬱な北国地方の、貧しい農家に生れて、教育もなく、奴隷のような環境に育った男は、軍隊において、彼の最大の名誉と自尊心とを培養された。軍律を厳守することでも、新兵を苛(いじ)めることでも、田舎に帰って威張ることでも、すべてにおいて、原田重吉は模範的軍人だった。それ故にまた重吉は、他の同輩の何人よりも、無智的な本能の敵愾心(てきがいしん)で、チャンチャン坊主を憎悪していた。軍が平壌(へいじょう)を包囲した時、彼は決死隊勇士の一人に選出された。

「中隊長殿！　誓って責務を遂行します。」

と、漢語調の軍隊言葉で、如何(いか)にも日本軍人らしく、彼は勇ましい返事をした。そして先頭に進んで行き、敵の守備兵が固めている、玄武門に近づいて行った。彼の受けた命令は、その玄武門に火薬を装置し、爆発の点火をすることだった。だが彼の作業を終った時に、重吉の勇気は百倍した。彼は大胆不敵になり、無謀にもただ一人、門を乗り越えて敵の大軍中に跳(と)び降りた。

　丁度その時、辮髪の支那兵たちは、物悲しく憂鬱な姿をしながら、地面に趺坐(ふざ)して閑雅な支那の賭博(ばくち)をしていた。しがない日傭人(ひようとり)の兵隊たちは、戦争よりも飢

餓を恐れて、獣のように悲しんでいた。そして彼らの上官たちは、頭に羽毛のついた帽子を被り、陣営の中で阿片を吸っていた。永遠に、怠惰に、眠たげに北方の馬市場を夢の中で漂泊(さまよ)いながら。
原田重吉が、ふいに夢の中へ跳び込んで来た。それで彼らのヴィジョンが破れ、悠々(ゆうゆう)たる無限の時間が、非東洋的な現実意識で、俗悪にも不調和に破れてしまった。支那人は馳(か)け廻った。鉄砲や、青竜刀(せいりゅうとう)や、朱の総(ふさ)のついた長い槍(やり)やが、重吉の周囲を取り囲んだ。
「やい。チャンチャン坊主奴(め)！」
重吉は夢中で怒鳴った、そして門の閂(かんぬき)に双手(もろて)をか

け、総身の力を入れて引きぬいた。門の扉（とびら）は左右に開き、喚声をあげて突撃して来る味方の兵士が、その隙間（すきま）から遠く見えた。彼は門を両手に握って、盲目滅法（めくらめっぽう）に振り廻した。そいつが支那人の身体（からだ）に当り、頭や腕をヘシ折るのだった。

「それ、あなた。すこし、乱暴あるネ。」

と叫びながら、可憫（かわい）そうな支那兵が逃げ腰になったところで、味方の日本兵が洪水（こうずい）のように侵入して来た。

「支那ペケ、それ、逃げろ、逃げろ、よろしい。」

こうして平壌は占領され、原田重吉は金鵄勲章（きんしくんしょう）をもらったのである。

下

　戦争がすんでから、重吉は故郷に帰った。だが軍隊生活の土産(みやげ)として、酒と女の味を知った彼は、田舎の味気ない土いじりに、もはや満足することが出来なかった。次第に彼は放蕩(ほうとう)に身を持ちくずし、とうとう壮士芝居の一座に這入(はい)った。田舎廻りの舞台の上で、彼は玄武門の勇士を演じ、自分で原田重吉に扮装(ふんそう)した。見物の人々は、彼の下手(へた)カスの芸を見ないで、実物の原田重吉が、実物の自分に扮して芝居をし、日清戦争

の幕に出るのを面白がった。だがその芝居は、重吉の経験した戦争ではなく、その頃錦絵（にしきえ）に描いて売り出していた「原田重吉玄武門破りの図」をそっくり演じた。その方がずっと派手で勇ましく、重吉を十倍も強い勇士に仕立てた。田舎小屋の舞台の上で重吉は縦横無尽に暴（あば）れ廻り、ただ一人で三十人もの支那兵を斬（き）り殺した。どこでも見物は熱狂し、割れるように喝采（かっさい）した。そして舞台の支那兵たちに、蜜柑（みかん）や南京豆（ナンキンまめ）の皮を投げつけた。可憫そうなチャンチャン坊主は、故意に道化（おど）けて見物の投げた豆を拾い、猿芝居のように食ったりした。それがまた可笑（おか）しく、一層チャンチャン坊主の

憐れを増し、見物人を悦ばせた。だが心ある人々は、重吉のために悲しみ、眉をひそめて嘆息した。金鵄勲章功七級、玄武門の勇士ともあろう者が、壮士役者に身をもち崩して、この有様は何事だろう。

　次第に重吉は荒んで行った。賭博をして、とうとう金鵄勲章を取りあげられた。それから人力俥夫になり、馬丁になり、しまいにルンペンにまで零落した。浅草公園の隅のベンチが、老いて零落した彼にとっての、平和な楽しい休息所だった。或る麗らかな天気の日に、秋の高い青空を眺めながら、遠い昔の夢を思い出した。その夢の記憶の中で、彼は支那人と賭博をしていた。

支那人はみんな兵隊だった。どれも辮髪を背中にたれ、赤い珊瑚玉のついた帽子を被り、長い煙管（キセル）を口にくわえて、悲しそうな顔をしながら、地上に円（まる）くうずくまっていた。戦争の気配もないのに、大砲の音が遠くで聴（きこ）え、城壁の周囲（まわり）に立てた支那の旗が、青や赤の総（ふさ）をびらびらさせて、青竜刀の列と一所に、無限に沢山連なっていた。どこからともなく、空の日影がさして来て、宇宙が恐ろしくひっそりしていた。

　長い、長い時間の間、重吉は支那兵と賭博をしていた。黙って、何も言わず、無言に地べたに坐りこんで……。それからまた、ずっと長い時間がたった……。

目が醒（さ）めた時、重吉はまだベンチにいた。そして朦朧（もうろう）とした頭脳（あたま）の中で、過去の記憶を探そうとし、一生懸命に努めて見た。だが老いて既に耄碌（もうろく）し、その上酒精（アルコール）中毒にかかった頭脳は、もはや記憶への把持（はじ）を失い、やつれたルンペンの肩の上で、空（むな）しく漂泊（さまよ）うばかりであった。遠い昔に、自分は日清戦争に行き、何かのちょっとした、ほんの詰らない手柄をした――と彼は思った。だがその手柄が何であったか、戦場がどこであったか、いくら考えても思い出せず、記憶がついそこまで来ながら、朦朧として消えてしまう。

「あア！」

と彼は力なく欠伸をした。そして悲しく、投げ出すように呟いた。

「そんな昔のことなんか、どうだって好いや！」

それからまた眠りに落ち、公園のベンチの上でそのまま永久に死んでしまった。丁度昔、彼が玄武門で戦争したり、夢の中で賭博をしたりした、憐れな、見すぼらしい日傭人の支那傭兵と同じように、そっくりの様子をして。

底本：「猫町　他十七篇」岩波書店、岩波文庫
１９９５（平成７）年5月16日第1刷発行
底本の親本：「萩原朔太郎全集」筑摩書房
１９７６（昭和51）年
入力：大野晋
校正：鈴木厚司
ファイル作成：鈴木厚司
２００１年10月11日公開
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫
（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、

校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。